

「愛のわざに励みつつ」(2023.7.16)

「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。

月日がたってから、それを見いだすだろう。」(コヘレト 11:1)

先日、教団の信仰告白をテーマにした 8 回にわたる説教を終えた。特に「愛のわざに励みつつ、主の再び来たり給うを待ち望む」という終末論的信仰について話した。なぜか、説教後もこの信仰が心を離れず、ず～と思い巡らし、そして、「改めて愛のわざに励もう」「勇気を出して愛のわざに励もう」そんな思いに導かれた。

終末論的信仰においては、主の再臨によって私たちの救いが完成する。人間の努力・頑張りによって、理想世界が実現するのではない。むしろ、世の終わりには、不法がはびこり、多くの人の愛が冷え、大きな苦難が襲うと主は予告された。そうすると、私達の愛のわざは一見無駄のように感じる。社会のための私達のいろいろな働きも伝道の働きも、もしかしたら徒労に終わるかもしれない。じゃ、ただ主の再臨を待望していればいいのか。

6 月 3 日の朝、牧師館の電話が鳴った。「母が、横手教会の牧師を呼んでほしい、そう言っています。」それで準備をし、由利組合総合病院に向かった。母とは、当教会の教友の M さんで、電話をくれたのが娘の N さんである。M さんの願いは、10 数年前に召された夫・S さんのように洗礼を受けることだった。次の日、改めて出直して、病床洗礼を授けた。天に大きな喜びが沸き起こるのを想像し、主によって癒され、当教会で共に礼拝を捧げる日を夢見ていた。しかし、10 日後、N さんから、母が召された、との知らせを受けた。M さんの家がある象潟に赴き、枕頭の祈りから斎場での収骨迄、親族の方々と二日間、時間を共にし、葬送の営みを終えた。嬉しさと共に淋しさと虚しさが心に広がっていくのを感じた。

上掲の御言葉で、パンを水の上に流すのだから、無駄にするように見える。パンとは私達の愛のわざであり、私の命・時間・宝である。しかし、月日がたってから見いだすのだ。もしかしたらそれは生きている時でなく、天に行ってからかもしれない。神は覚えていて下さるということだ。天に宝を積むということかと思う。愛のわざは水に流れて消えてしまったとしても、愛そのものは滅びない。「愛は決して滅びない。」(I コリント 13:8)、このみ言葉が光を放ってきた。イエス様の姿が浮かんでくる。だから、勇気を出して愛のわざに励みたい。チャレンジしていきたい。

